

この譬え本体は 1 節後半~15 節であると考えられます。この譬えで注目されるのは労働時間に拘わらず全員が 1 デナリオンの賃金を受け取ったことです。1 時間働いた労働者が 1 デナリオンを貰うのを見た時、12 時間働いた労働者は自分たちはもっと貰えるだろうと期待しましたが、契約通り 1 デナリオンを貰えただけでした。マタイの文脈からこの譬えをみますと、マタイは 16 節の編集句を加えることにより、19:30 を受けて、終末の時には、この世におけるユダヤ教徒とキリスト教徒の序列・優劣が逆転するであろうというイエスの預言の例示として、この譬え全体を解釈するようにと促しているのです。最初に来た者、長期間苦勞して神の歴史を担ったユダヤ教徒の異議は、ごく短期間それを担ったに過ぎないキリスト教徒と同一の報いをされたことです。

では、イエスの譬えは本来そのようなものであったのでしょうか。働きの多少に応じて、報酬にも差がつけられるという考えは、私たちの賃金の考えに一致しています。この譬えを聞いて納得できない人が多いのはこの考えが根底にあるからです。では、この主人のしたことは正しくないのでしょうか。契約を履行しています。主人は、「私は支払ってやりたいのだ」という与える者の意思だけが、支払いの根拠だと言っています。彼らおよび聴衆の公正さの基準は、労働時間、業績です。一方、主人にとって公正さの基準は業績ではなく、労働者としての存在に對価を与えています。1 デナリオンは賃金ではなく、人間存在に対する絶対的価値であり、どの労働者もその存在が等しく価値づけられているのです。西欧社会の社会保障制度、失業保険や健康保険などの制度が発達したのはこの譬え、この譬えの精神が語り継がれたことが根底にあると言われていました。現代社会において、労働者の賃金は能力主義に基づいて評価されています。この能力主義は経済活動・発展には不可欠と思われませんが、それにより様々な理由で業績を挙げられない人は人間の価値がないとされる風潮が生じてしまい、劣っていると評価された人の存在の否定あるいは差別に繋がります。主人は「わたしの気前のよさをねたむのか」と問います(15 節)。人間の存在そのものを肯定する神さまの気前のよさの前に、人間間の優劣は存在しないのです。しかし、人は自分と他人とを比べ、その優劣を量り、特に自分より劣っていると思われる人が自分と同じように、あるいは自分以上に扱われる時、そこに理不尽さ、不愉快さを感じるのです。

イエスは、業績により人間を評価することを前提する聴衆に、すべての人は神さまによって一人一人の存在が是認され、等しく生かされている事実をこの 1 デナリオンの賃金により示し、人間の価値基準の転換を促しているのです。